

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.084; おわりに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008658

おわりに

山本紀夫

本報告書のもとになった共同研究会は、「はじめに」でも述べたように私が民博在職中に主宰した最後のものではあった。そして、最終回の共同研究会を実施して1週間後の2007年3月末日をもって、私は定年により30年あまり勤めた民博を去った。それだけに、この「おわりに」を書いていても感慨ひとしおであり、この「おわりに」もきわめて個人的なものにならざるを得ない。そのため、論集の「あとがき」としては異例かもしれないが、以下では私自身によるドメスティケーション研究の回顧とともに、今後の展望について私の考えを少し述べておきたい。これは、ドメスティケーション研究の本格的な「回顧と展望」を述べるには、私の力では不足していると判断したからでもある。

文化人類学会の前身である民族学会に、私が入会したのは今から35年以上も前の1972年のこと、当時私は民族学を専攻する学生ではなく、京都大学農学部の大学院生であった。その背景には、栽培植物の起源やドメスティケーションなどの研究に対する農学的方法に大きな不満を抱き、民族学に期待したという事情があった。当時の私は、南米原産とされる栽培植物の起源に関心があり、そのため1968年から69年にかけて学生の身でありながら自分で調査隊を組織して研究者にも加わってもらい、ペルーやボリビアなどの中央アンデスでタバコなどの栽培植物の起源に関する調査をおこなった¹⁾。また、1971年にも京都大学のアンデス栽培植物調査隊に現地参加し、研究者たちとともにジャガイモを中心とする栽培植物の起源に関する調査をおこなった。

これらの調査隊に参加していた研究者は遺伝学や育種学の専門家であったが、その調査方法にやがて私は大きな疑問を抱くようになった。それというのも、栽培植物は人間によって創られた植物であるにもかかわらず、農学者たちの関心は植物だけ、もっと率直に言えば遺伝子だけであり、植物のドメスティケーションに関係する人間の行為や認識などの文化について彼らはまったく関心を示さなかったからである。とはいえ、ではどうするかといえば、当時の私に解決策はなかった。

こうして、私は栽培植物の起源に関する研究を植物学的手法で進めながら、一方で人間の文化を対象とする民族学にも関心をもつようになり、民族植物学的なアプローチを模索するようになったのであった。このような二足わらじ的な研究生活のなかで考えついた研究対象こそがトウガラシであった。トウガラシは、食料源としては決して重要な作物とはいえないが、中南米の人たちにとって欠かせない、いわば文化的にきわめて重要な作物であると判断したからである。そして、学位論文の対象としてもトウガラシの起源と栽培化をテーマとして取り上げることにし、農学的方法とともに民族植物学的方法も取り入れようとした。

しかし、当時、私の指導教官であった故田中正武教授は学位論文のための研究としてはあくまで農学的方法を貫くべきであると主張され、民族学的方法の採用には否定的であった²⁾。これは、当時の民族学がまだ十分に認知されておらず、とくに自然科学の世界では民族学の存在さえ十分に知られていなかった状況を判断してのことであったようだ。その当時のことを振り返れば、ここに、こうして「ドメスティケーション—その民族生物学的研究」の論集を刊行できるようになったことには隔世の感がある。

この点で、「はじめに」でも紹介した故中尾佐助先生が、パイオニアとして日本における民族植物学的研究に果たされた役割の大きさをあらためて指摘しておきたい。中尾先生は、ドメスティケーションと密接な関係をもつユニークな農耕文化論を1966年に日本で初めて提唱、これは農学の世界ではもちろんのこと、民族学・文化人類学の分野でもきわめて大きな影響を与えた³⁾。さらに、民博の共同研究会などでも厳しく、かつユニークな言動で若手研究者にも大きな刺激を与えてこられた。その学恩のおかげをこうむっている研究者は、本共同研究会でも少なくないはずである。

たとえば、私もそのひとりにほかならない。1968年のアンデス調査の準備を始めたとき、私は中尾先生から様々なアドバイスをいただき、その後もおりにふれて励ましていただいた。そのおかげで私は民族植物学的な研究を40年近くにわたって継続することができた。とくに、いまから20年近く前、中尾先生が民博の評議員であった当時、私に問いかけられた「民博だからこそ可能になったといえる研究が民博にあるのか」という質問は、「独創的な研究とは何か」ということを常に考えさせるものとなった。いま、この報告書を手にして、「これこそは民博だからこそできた研究のひとつです」と彼岸に去られた中尾先生に報告したい。

中尾先生とともに、あるいは中尾先生よりももっと強く文理融合的な研究の重要性を私に教えてくださった方がおられる。その人こそは、民博の初代館長であった梅棹忠夫先生である。梅棹先生は、動物学から民族学に転向、その後のユニークな研究活動は広く知られているだろう。その梅棹先生に私は学生時代から親しく接することができ、そのおかげで専門にとらわれない、領域を超えた柔軟な考え方や研究の方法を学ぶことができた。後に、私も植物学から民族学に転向することになったが、これも梅棹先生の生き方に影響されるところが大であった。

文系と理系の領域を超えた研究をめざした本報告書にいたる道も、元はといえば、これら両先生との出会いから始まったのであった。そのような意味でも、文理融合研究の道を切り拓き、農耕や牧畜の起源に関しても大きな貢献を果たされた中尾、梅棹両先生に本報告書を感謝の念をこめて捧げたい。

ただ、近年の研究の動向をみていて、残念に思うこともある。それは、研究の専門化、細分化にいいよ拍車がかかり、異分野の研究にまで関心をもつ研究者がきわめて少なくなっていることだ。これは共同研究会の実施中もしばしば痛感したことであり、

とくに若手の研究者にその傾向が強かった。

じつは、これは共同研究会でよりも、共同研究会の前に実施したフィールドワーク中にはるかに強く感じていたことであった。私はヒマラヤで3年間、アンデスでも4年間におよぶ長期の総合的な調査をおこない、そこには文系のみならず理系の研究者の参加も得て、それぞれの専門分野を超えた文理融合的な研究をめざした⁴⁾。この点で、とくに大学院生を含む若手研究者にかける期待は大きかったが、その期待に反して彼らの大半が自分の専門以外のことにはあまり関心を示さなかった。

このような状況を反映してか、残念ながら本報告書にも若手研究者の共同研究員による寄稿が少なくなった。おそらく、これは若手研究者だけの責任ではなく、むしろ彼らを取り巻く厳しい状況のせいかもしれない。いまや学問の世界は常に厳しい評価にさらされ、私の学生時代のように悠長に模索する余裕はほとんどなくなっていると考えられるからだ。また、学位をとってからでも、1本でも多くの論文を競って書かなければならず、それも欧文の研究雑誌への投稿が求められる時代になっている。

このような厳しい状況にあっても、ドメスティケーション研究に挑戦しようとする研究者にとっては嬉しいことがある。それは、ドメスティケーションの民族生物学的研究には未開拓の興味深い分野が多く残されていることだ。とくに、ドメスティケーションに関する生物学的研究における大きな発展に比べれば、その人間の側からの研究はまだ緒についたばかりといっても過言ではないほどである。

その例を一つだけあげておこう。栽培面積のうえで世界の4大作物の一つとして知られるトウモロコシである。トウモロコシはアメリカ大陸で栽培化された、ほとんど唯一ともいえる穀類であり、また新大陸文明の成立や発達にも大きな役割を果たしてきた。そのため、トウモロコシについては膨大な研究があり、その起源についてもかつて様々な説があった。その起源地についても中米、アンデス、あるいはその両方で多元的に生まれたという説もあった⁵⁾。そのため、京都大学農学部では中南米に何度もトウモロコシの起源に関する調査隊を送り込んだ。その隊員であった私はアンデスだけでなく、アマゾン源流域も3ヶ月近くにわたってカヌーを使ったり、馬に乗って踏査したが、トウモロコシの野生祖先種を発見することはできなかった⁶⁾。その後、本報告書の福永論文でも紹介されているように、トウモロコシの栽培化に関する生物学的な研究は大きな進展をとげ、現在ではトウモロコシの祖先種はテオシントであり、起源地も中米であることが確実視されるようになっている。

それでは、このトウモロコシの栽培化に人間はどのように関与したのだろうか。この点について私は今から20年ほど前に少し考察したことがあるが⁷⁾、それ以降ほとんど進展はないようだ。近年、*Histories of Maize* と題してA4版で700頁近い大著が刊行され、トウモロコシの起源について考古学や生物学などの学際的成果が発表されているが、それでもトウモロコシの栽培化に人間がどのように関わったのか、という問題はほとん

ど扱われていない⁸⁾。このテーマは困難な問題であるとして誰も挑戦しようとしなかったのかもしれないが、私自身は民族生物学的にきわめて魅力的なテーマであると考えている。トウモロコシは、人間の力を借りないで繁殖することがまったく不可能になっており、その意味で数多くの栽培植物のなかでも極限といえるほどに、野生植物が人間によって大きく創りかえられたものになっているからだ⁹⁾。

ここでトウモロコシを例として取りあげたが、栽培化に人間がどのようにかかわったのかという問題について明らかにされていない栽培植物はトウモロコシだけではない。むしろ、ほとんどの栽培植物でこの問題は明らかにされていない。その状況は本論集の議論からもうかがえるかもしれないが、その一因は植物の利用や認識に関心をもつ民族学・文化人類学者がきわめて少ないことに求められそうである。

一方で、植物や動物の利用・認識などを詳細に記述分析してきた生態人類学は、栽培化や家畜化と密接な関係をもつ狩猟採集から食糧生産への移行のプロセスについて大きな貢献を果たしてきた。その代表的な例がリーたちの研究であろう¹⁰⁾。彼らの研究は、狩猟採集民の生活が飢えや厳しい労働との戦いであるという従来の考え方を根底からくつがえすものであった。そして、それは狩猟採集から食糧生産への移行のプロセスを考える上でも大きな示唆を与えるものとなったのである。

このような貢献が民族学・文化人類学にも求められているのではないか。人類史のなかで栽培化および家畜化はきわめて大きな意味をもち、しかも栽培化も家畜化も人間の関与なくしてはおこり得なかったものだからである。そして、その栽培化や家畜化に関係する人間の行為や認識に関する研究は、民族学・文化人類学こそが推進しなければならないのだ。

ただし、研究の専門化・細分化にともない、一人の研究者がおこなえることには大きな限界がある。これまでのように、一人の研究者による民族学と生物学の異分野横断的な研究はきわめて困難になってきているからだ。そこで、それにかわる方法の一つを提案しておきたい。それは、民族学・文化人類学と生物学などの異分野の研究者が力をあわせて民族生物学的な共同研究をおこなうことである。かつて私はヒマラヤで野生サトイモ科植物の利用に関して植物学者と共同で調査研究をおこない、その共同研究の有効性を知った¹¹⁾。そのため、本報告書でもジャガイモの栽培化に関しては自然地理学者と、またアンデスの雑穀のキヌアの栽培化に関しては農学者たちと共同で論文を書いたが、ともに文理融合的な共同研究の試みにほかならなかった¹²⁾。

もちろん、文系と理系の領域を超えるためには、さまざまな障壁を覚悟しておかなければならない。また、そのためには大きく異なった領域を超えてでも真理を明らかにしようとする強い知的好奇心が何よりも不可欠である。とにかく、文系と理系の領域を超えた文理融合型の研究は、「はじめに」で述べた民族学・文化人類学の閉塞的な状況を打破し、大きく跳躍させる可能性を秘めている、と私は考えている。

たまたま、これを書いている最中に刊行された雑誌のなかのエッセイで、脳科学者の養老孟司氏も次のように理系と文系の融合を提言している。

「・・・人間の抱える問題の多くは、当然ながら理系の角度だけでは解決できない。いい案を出そうと思ったら、X軸とY軸のように直角に理系と文系をくっつけるのがいい。X軸からY軸を見れば、何をやっていようが全部ゼロ。Y軸からも同じ。お互い関係ないと思っていれば何も起きないが、無理やりにでも協力し合えば合力が生まれるのである」¹³⁾。

本共同研究会が、理系と文系のあいだにある大きな障壁を超えて、このような「合力」を生んだのかどうか、その判断は読者にゆだねたいが、その目的に向かっての大きな第一歩は踏み出せたのではないかと、私自身は考えている。

最後に、2年半にわたる共同研究会に参加したうえで、本報告書に論文を寄稿してくださった共同研究員の皆様方に厚く御礼を申し上げたい。とくに、本報告書が民博の刊行物として出版されることを考慮して、人文系の研究者も理解できるように、理系の研究者の皆さんには可能なかぎり平易な表現をお願いしたが、それでも難しいと思える論文に関しては何度も改稿をお願いした。そのような論文の執筆者の方たちには大変なご面倒をおかけすることになり、深くお詫びするとともに厚く感謝したい。また、本書があまりにも膨大になるためゲストスピーカーの方々には執筆をお願いできなかったが、いずれの発表および議論も当研究会にとって大変有意義かつ刺激的であったことを明記しておきたい。

そのような中で、稲村哲也氏の論文は文章量がかなり多くなっているが、これはアンデスだけでなく、西アジアの家畜化や牧畜についても視野に入れていただき、地域間比較研究の重要性を示していただくためであった。また、大田正次教授（福井県立大学）は共同研究員ではなかったが、共同研究会で発表していただいたうえで本報告書にも特別に寄稿していただいた。これは、大田教授の専門とするコムギが、トウモロコシやイネ、ジャガイモとともに世界の4大作物であるため、本書に欠かせないと判断したからである。

本報告書の作成にあたっては、民博の出版委員会に審査の労をとっていただき、査読委員からも貴重なコメントをいただいた。膨大で煩雑な編集作業を遂行してくださったのは、民博編集室の穴水見子さん、そして私の研究室の山本祥子さんである。本報告書のレイアウトおよび割付も主として山本祥子さんの尽力によるが、その方法については京都大学学術出版会の佐伯かおるさんにご指導いただいた。索引づくりにあたっては、一部の学名を加藤真京都大学教授（生物学）にご教示いただいた。また、本稿をまとめるにあたっては、民博図書系の近藤友子さんと岡島礼子さんに数多くの文献の探索や借用に尽力していただいた。最後になったが、共同研究会の実施にあたっては民博の共同利用係はじめ、管理部のスタッフの皆さんのご協力があった。

以上、ご協力いただいた皆様方に「ありがとうございました」と厚く御礼を申し上げます。
(2009年1月11日記)

注

- 1) この調査隊は、京都大学の学生の文化団体である探検部の主催によるもので、田中正武隊長（当時京都大学農学部助教授）のほか、メンバーが3名の隊であった。
- 2) この結果、私は民族植物学的なアプローチを断念、学位論文のための研究はもっぱら生物学的な方法によっておこなった。この学位論文は1978年、下記の題目で京都大学農学部へ提出、同年に農学博士の学位が授与された。

Yamamoto, Norio *The Origin and Domestication of Capsicum Peppers*.

また、その民族生物学的研究の成果は、この学位論文を提出しあと、10年以上も経た1995年に下記の論文で発表した。

山本紀夫 1995 「栽培化とは何か：トウガラシの場合」福井勝義編『自然と人間の共生—遺伝と文化の共進化 講座地球に生きる4』pp. 61-93, 雄山閣。

- 3) 1966年に岩波新書として刊行された中尾佐助著『栽培植物と農耕の起源』は現在も50刷をこえて読みつかれている。また、この翌年に発表された「農業起源論」もきわめてユニークな農耕文化論である。これらについては以下のような解説および解題も発表されている。

中尾佐助 1967 「農業起源論」森下正明・吉良竜夫編『自然—生態学的研究』（今西錦司博士還暦記念論文集）pp. 329-494, 東京：中央公論社。

佐々木高明

1994 「根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見—中尾佐助博士の農耕文化の大類型区分をめぐって—」『農耕の技術と文化』17: 104-133。

2003 「根栽農耕文化論の成立と展開—オセアニア・東南アジアの文化史的復元に関する若干の問題」吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト 人類の生存を支えた根栽農耕』pp. 269-288, 東京：平凡社。

- 4) ヒマラヤ調査もアンデス調査も、どちらも文部省（当時）および文部科学省の助成金によるもので、その正式名称および成果などは以下のとおりである。

「ヒマラヤにおける草地・森林利用の動態に関する民族学的研究」（1994年～96年度）研究代表者の山本紀夫のほか、12名の文系および理系の研究者が参加した。この成果としては、下記の報告書を刊行した。

山本紀夫・稲村哲也編 2000 『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界』東京：八坂書房。

「アンデス高地における環境利用の特質に関する文化人類学的研究—ヒマラヤ・チベットとの比較研究」（2001年度～04年度）研究代表者の山本紀夫のほか、11名の文系および理系の研究者が参加した。この成果としても、下記の報告書を刊行した。

山本紀夫編 2007 『アンデス高地』京都：京都大学学術出版会。

- 5) かつてはトウモロコシのアジア起源説もあった。その説を最初に唱えたのは以下の報告にみられるように Collins (1912) であり、その説を発展させたのが Anderson (1945) であった。

Collins, G. N. 1912 Origin of maize. *J. Washington Acad. Sci.* 2: 520-530.

Anderson, E. 1945 What is *Zea mays*? A report of progress. *Chron. Bot.* 9: 88-92.

- 6) この調査ではトウモロコシの祖先野生種を発見することはできなかったが、近縁野生種のトリプサカムを発見することができた。この調査結果については以下の報告を参照されたい。
Yamamoto, N. and M. Tanaka 1974 New evidence on the distribution of *Tripsacum australe* in Bolivia. *Report of Plant Germ-Plasm Institute*, Kyoto University, pp. 6-8.
- 7) 山本紀夫 1993 「植物の栽培化と農耕の誕生」 赤澤威・阪口豊・富田幸光・山本紀夫編『アメリカ大陸の自然誌3 新大陸文明の盛衰』 pp. 1-48, 東京：岩波書店。
- 8) Staller, J. R. Tycot and B. Benz (eds.) 2006 *Histories of Maize. Multidisciplinary Approaches to the Prehistory, Linguistics, Bioegography, Domestication, and Evolution of Maize*. Academic Perss.
- 本書の中で、トウモロコシの栽培化について面白い説が紹介されている。すなわち、人間はトウモロコシの穀粒を食用として利用し始めたのではなく、最初は甘い茎を食べるために利用を始めたとされる。この説についての詳細は次の論文を参照されたい。
Iltis, Hugh H. 2000 Homeotic sexual translocations and the origin of maize (*Zea Mays*, Potaceae): A new look at an old problem. *Economic Botany* 54(1): 7-42.
- 9) トウモロコシは、種子をつける雌性花序（雌穂）が何枚もの苞葉で包まれ、しかも種子が穂軸にしっかり付いているため、自然に繁殖することはできない。また、たとえ雌穂が脱落したとしても、数多くの種子がついているため、そのあいだで水や養分をめぐって激しい競争が生じ、枯死することになるだろう。
- 10) Lee, R. and I. De Vore (eds.) 1968. *Man the Hunter*. Aldine.
- 11) 土屋和三・山本紀夫 2000 「有毒イモを食べる—半栽培植物の利用」山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌 山岳地域の自然とシェルバの世界』 pp. 139-157, 東京：八坂書房。
- 12) このような試みは私だけでなく、文化人類学者であり、本共同研究会の班員でもあった稲村哲也氏も以下のように遺伝学者との共同研究を積極的におこなっている。
稲村哲也・川本 芳 2005 「アンデスのラクダ科動物とその利用に関する学際的研究—文化人類学と遺伝学の共同」 関 雄二・木村秀雄編『歴史の山脈—日本人によるアンデス研究の回顧と展望—』(国立民族学博物館調査報告55) pp. 119-187。
- 13) 養老孟司 2008 『理系と文系の思考の違いとは?』『SKYWARD (JAL グループ機内誌)』2009年1月号：23。